

## 【 宮城県名取市の方言概観 】

ここでは、今回の会話集に現れた特徴を中心に、伝統的な名取市方言の音声や文法を概観していきます。

### ㊦ 音 声

#### 【子音】

##### ▼カ・タ行の有声化

語中・語尾にあるカ・タ行の音が有声化し、ガ・ダ行になる。

☞これは平たく言えば、単語の頭以外にあるカ・タ行の音が濁音のガ・ダ行になることです（専門的に言えば、（有声）母音に挟まれた無声子音/k/t/が有声子音/g/d/になること）。単語の頭にあるカ・タ行は普通は有声化しません（下の例で言えば柿は「ガギ」にはなりません）。

例) カ行→ガ行 (/k/→/g/) : 開ける → アゲル、柿 → カギ  
タ行→ダ行 (/t/→/d/) : 旗 → ハダ、 的 → マド

今回の会話集からも、カ行音については、「オハガ」（お墓）「イギデ」（行きたい）「ローソグ」（蝋燭）「ハダゲ」（畑）「ホゴデ」（そこで）など、タ行音については「カリダ」（借りた）「マイニジ」（毎日）「ジズワ」（実は）「ミデ」（見て）「アド」（あと）など、多くの例が聞かれます。ただし、完全にガ行やダ行に濁るのではなく、共通語の発音よりはやや濁っているといった程度の発音も聞かれます。それら軽度の有声化音も、文字化資料ではガ行・ダ行の文字で表示してあります。

##### ▼ガ・ダ・ザ・バ行の鼻音化

語中・語尾にあるガ・ダ・ザ・バ行の音が鼻音化する。

☞単語の頭以外にあるカ行がガ行になることによって、「開ける」はアゲルになってしまい、「上げる」と混同しそうですが、「上げる」のほうはゲが鼻にかかった音（鼻濁音とも言い、この現象を鼻音化と言います。ここでは「ケ°」のように半濁点で表記します）のアケ°ルとなり、

「開ける」＝アゲル

「上げる」＝アケ°ル

で両者の混同は起こりません。今回の会話集の中でも「キタカ°マ」(北釜)「スキ°デ」(過ぎて)「スク°」(すぐ)「ユリアケ°」(閑上)「スコ°ド」(仕事)などが聞かれました(ただし、鼻にかかっているのかいないのか微妙で、聞き取りの難しいケースも多くありました)。

同様にダ・ザ・バ行も鼻音化します(ここでは「ンダ・ンゼ・ンビ」のように上付きのンで表記します)。

名取市の会話集からは、「ヒンドガッタ(ひどかった)」「チョーンド(丁度)」「ハンズメデ(初めて)」「ランズオ(ラジオ)」「スンバラグ(しばらく)」「アンブラカン(油缶)」などが聞かれました。ただし、これに関してはすべてのダ・ザ・バ行音で聞かれたわけではなく、またその程度も経度なものがあります。この会話集では、はっきりと鼻音が聞こえるもののみ上付きのンを付しています。

例) ガ行：上げる → アケ°ル

ダ行：肌 → ハンダ

ザ行：風 → カンゼ

バ行：首 → クンビ

### ▼キ(キャ行)の口蓋化

キが「チ」に近く発音される。また、キャ、キュ、キョも「チャ、チュ、チョ」と似たように発音される。

☞一般的にはこれは「口蓋化」の一種と見られています。口蓋化とは舌の前の部分が上あご(硬口蓋)に接近する現象を言います。キがキとシの中間のような音になるとい、似た現象は東北一般で見られますが、宮城では極端な口蓋化が起こってチに近くなります。

例) 機械(きかい) → チカイ

救急車(きゅうきゅうしゃ) → チューチューシャ

今日(きょう) → チョー

名取市においてもこの現象は見られます。今回の会話集には、「チーダ」(聞いた)や、チが有声化してジとなっている「サジッチョ」(先つちよ)などが聞かれました。ただし、そこまで極端に口蓋化が起こっているのはさほどありませんでした。キかチか迷うものや、共通語と同じくキであるものも多くあります。

### ▼シュ、ジュ、チュの直音化

シュが「ス」、ジュが「ズ」、チュが「ツ」と発音される。

☞今回の会話集からは「ヒトバンズー」（一晩中）や「クンズーネン」（90年）のようにジュが「ズ」と発音されている例が聞かれました。また、ジュと表記したのもので、共通語よりはズに近く発音されています。この直音化に中舌化（後述）も合わせると、シ・ス・シュがすべて「ス」、ジ・ズ・ジュがすべて「ズ」、チ・ツ・チュがすべて「ツ」という発音となります。また、語中のタ行は有声化するわけですから、チ・ツ・チュが「ズ」となることもあります。そのような例としては、「イズズハン」（一時半）、「サンカ°ズ」（三月）などの例が聞かれました。

### 【母音】

#### ▼イとエの統合

イとエが同じ発音となる。

☞母音単独で発音されるイとエは区別されず、ともにエに近い音になります。

例) 息（いき）、駅（えき） → 両方ともエギ  
鯉（こい）、声（こえ） → 両方ともコエ

名取市の会話集でも「エダ」（居た）、「エグ°」（行く）などが聞かれました。ただし、完全にエになっているものは少なく、イとエの間のような音や、共通語のイと同じ音も多く聞かれました。

#### ▼シとス、ジとズ、チとツなどの中舌化

イ段音とウ段音が近い音となる。

☞イの音がウの音に近づく現象（またはその逆も）を「中舌化」（ちゅうぜつか、なかじたか）と言いますが、宮城ではイ段音とウ段音でこの中舌化が起き、ニとヌ、ミとム、リとルなどが互いに近い音になります。これらは一応の区別がありますが、名取市の会話集では、特にニとヌは相当接近しているため、「ナヌカ」（何か）、「ムスユヌ」（息子に）などと表記しているところもあります。シとスに関しては両方とも「ス」、ジとズは両方とも「ズ」、チとツは両方とも「ツ」と発音され、これらは区別がありません。

例) 獅子 (しし)、煤 (すす)、寿司 (すし) → すべてスス  
知事 (ちじ)、地図 (ちず)、辻 (つじ) → すべてツズ

今回の会話集からも「スンペー」(心配)「ズスン」(地震)「コッツ」(こっち)「サンズ」(三時)など、多くの例が聞かれますが、すべてが中舌化しているわけではなく、シとス、ジとズ、チとツが、似た発音ではあるものの一応の区別はなされている、というものも多くあります。また、共通語とあまり変わらない発音が聞かれることもあります。

#### ▼その他、以下のような特徴もあります。

- ・ヒの音がシに近い音となる。

「シ」(日)、「シト」(人)、「シコージョー」(飛行場)などが名取の会話集からは聞かれました。

## ¶ アクセント

名取市はアクセントの型がない無型アクセント地域である。

☞例えば「箸」と「橋」を声に出したときに、有型アクセントの地域ではハとシの音の高低が決まっています(=型がある)、それによって単語の区別がつかますが、無型アクセント地域では高低が決まっていない(=型がない)ため、区別されません。

共通語話者がこの無型アクセントの発音の地域のことばを聞くと、文が平らでのっぺりしているとか、区切れがわからず意味が取りにくいとの印象を受けるようです。アクセントの型がないためか、同じ無型アクセント地域の福島県や茨城県などに似た独特の音調が聞かれます。

## ¶ 文法

### 【格助詞】

#### ▼「が」「を」の不使用

共通語の「が」「を」にあたる格助詞を使わないことが多い。

☞共通語の「が」のような主格を表す助詞や、「を」のような目的格を表す助詞が用いられず、以下のように無助詞で表示されることが多いです。

例) 主格 : 俺 行く (俺が行く)  
目的格 : 酒 飲む (酒を飲む)

名取でも「ツナミ クル」(津波が来る)、「ハナシ キクト」(話を聞くと)などのように、助詞が見つからないものも多くあります。

☞また、共通語の「を」相当のものとしては「バ」や「ドゴ」が用いられることもあります。

例) 酒バ飲む (酒を飲む)  
俺ドゴ連れて行ってくれ (俺を連れて行ってくれ)

今回の会話集では、「オラエノ トーチャンドゴ イシャサ ツレデイガナクテネーガラ」(うちの父ちゃんを医者に連れていかなきゃならないから)という「を」相当の「ドゴ」の例が聞かれました。

## ▼「サ」

「へ」「に」に当たる格助詞に「サ」がある。

☞「サ」は共通語の「へ」よりも意味が広く、「に」に重なるところが多いですが、存在の場所を表す「ここサある」は言えないなど、その用法は「に」とは若干の違いがあります(ただし、若年層では存在の場所を表す「サ」も使えるという報告もあります)。

例) 東京サ行く  
おれサ貸せ  
見サ行く

名取市の会話集からは、「ソドサ デロ」(外へ出る)、「クルマサ ノッテロ」(車に乗ってろ)など多くの「サ」が聞かれます。また、若年層に広まっている存在の場所を表す「サ」も見られましたが(「ソゴラサ アンノ、ミナ ナケ° デモイーガラー」(そこらにあるの、みんな捨ててもいいから))、一方で「イエニ イダノ」(家に居たの)のように「ニ」で現れるものもありました。

【助動詞】

▼「べ」

共通語の「～だろう」(推量)や「～しよう」(意志)に相当する助動詞に「べ」がある。

☞「べ」は<推量><意志>のほかにも<確認><勧誘>などがあり、その用法は多岐にわたります。また、「取る、起きる、来る」など「る」で終わる動詞に接続するときは「る」が「ッ」となる促音便が生じ、それぞれ「トッペ、オギッペ、クッペ」のようになります。

- |                             |      |
|-----------------------------|------|
| 例) 明日、雨だべ (明日雨だろう。)         | <推量> |
| 明日は早く起きッペ (明日は早く起きよう。)      | <意志> |
| お祭り、お前も行くべ? (お祭り、お前も行くだろう?) | <確認> |
| みんなでがんばッペ (みんなでがんばろう。)      | <勧誘> |

名取市の会話集では「マッシロダンベァ」(真っ白でしょう)という<確認>の例が聞かれました。

▼「タ」「タッタ」

「タ」は共通語の過去・完了の助動詞「た」よりも用法が広く、現在目の前にあることの確認などにも使われる。

- 例) (私は今、) 学校にいる → 学校にイタ  
 (私は今、) 手紙を書いてる → 手紙をカイテタ

また、「タッタ」は過去の思い出など、現在と切り離された過去で用いられる。

☞「タッタ」は、「タ」と比べて過去の出来事が発話時に存在する場合には使われにくく(この場合は「タ」が用いられます)、過去の出来事が発話時に存在しない場合に使用されやすくなります。これを上記では「現在と切り離された過去」と表現しました。

以下の例で説明すると、①は昨日もらった桃が今もあるときの発言であり、これは過去の出来事が発話時に存在すると読みとることができます。このような場面では「タ」が使われます。②は昨日もらった桃が今はもうないという状況であり、これは過去の出来事が発話時に存在しないと捉えられます。このとき、「タッタ」が用いられます。

- 例) ①きのう、近所の小沢さんに桃をモラッタ。あんたも食べる?  
 ②きのう、近所の小沢さんに桃をモラッタッタ。

あんたが来るなら少し残しておけばよかったなあ。

<例文は竹田（2011）より引用>

名取市の会話集からも、この「タ」「タッタ」が聞かれます。現在家にいるというときに「イシタ」（います）が使われ、過去のある時点で家にいるというときには「ヒエニ イダッタノ」（家にいたの？）が使われています。

### 【終助詞】

#### ▼「チャ」

強調、当然、働きかけの意味を表す「チャ」が用いられる。

☞具体的には、相手が知っているはずの事柄を示し確認させるなどの機能があり、共通語の「でしょ」「じゃない（か）」「よね」などのような意味を持ちます。

名取市の会話集でも多くの「チャ」が聞かれますが、「じゃない（か）」「よね」などの確認させる意味のほかにも、「ナンダガ、カゼデモ ヒーダダガ、ハヤメニ ミデモラウッチャ」（なんだか、風邪でも引いたのか、早めに診てもらおうよ）のように「よ」に相当するような「チャ」も聞かれました。

#### ★その他、以下のような特徴もあります。

・逆接既定条件（共通語の「けれども」）は名取市では「ゲンド（モ）」「ゲント（モ）」が用いられる。順接既定条件（共通語の「から」）は「カラ」が用いられる。

・待遇表現は「ス」「(デ) ガス」「(デ) ゴザリス」「イン」「サイン」などが用いられる。

例) ス：アナデモ ホンノスカ（穴でも掘るんですか）

(デ) ガス：ホントデネンデガス（本調子じゃないんです）

(デ) ゴザリス：オハヨーゴザリス（おはようございます）

イン：ノンデ コライン（飲んでいらっしやい）

サイン：アカ° ッサイン（お上がりなさい）

### 【参考文献】

加藤正信（1969）「東北方言概論」『言語生活』210

加藤正信（1992）「宮城県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院

- 佐藤亨（1982）「宮城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会
- 竹田晃子（2011）「テンス形式および文末の「ケ」の用法」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿岸地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救うー3.11 被災地からの提言ー』ひつじ書房